

「正義」と「勝てば官軍」

岩田 一彦

どんな戦争も「大義名分」の旗の下に行われる。「人類を破滅に導く大量破壊兵器の拡散を防止する」、「圧政に苦しめられているイラク国民をフセインの独裁政治体制から開放する。」などの明確な目的が語られる。「正義」の旗の下で、兵士も一般市民も士気を鼓舞される。

この正義のための戦争は、いつも指導者を英雄にする装置として働いている。ブッシュ大統領もブレア首相も、開戦と同時に支持率が急上昇している。強国のリーダーにとって、戦争は魅力がある。戦後その正義がどのような結末をみたかを検討してみると、「勝てば官軍」という戦争の本質がよく見える。

△兵庫教育大学教授V

運命を歩むという視点

宇田川 宏

国もまた、個人と同様、運命を歩み、歩まざるをえない。

長く蓄積された文化と巨大な社会組織からなる一つの国は、他国との緊張関係のなかで、その運命を未知の未来へ向けて全力を傾けて選び、歩む。人命が失われ、国の存亡にも関わる戦争も、同じように選択される。

したがって、戦争は、それを選択せざるを得なかった当時の内外の厳しい状況と、その中での人々の苦闘を軸に語られなければならない。そのとき、国民にとって意味のある歴史になる。戦争を現代の価値観で整理して語ることは、歴史を担った人々を冒瀆する不適当な行為と言わざるをえない。

△日本福祉大学名誉教授V

沖繩より近い地に生まれ育った兵士

馬居 政幸

昨年ソウルで生活し、韓国の若者がインターネットを駆使して新たな社会を創る過程を感じた。その彼女らがなぜ盧武鉉氏を大統領に選んだか。兵士として北韓と戦いたくないから。

20才以上の男性は全員二年半前後の兵役が義務。退役後も戦争になれば直ちに部隊に戻り銃を取る。私が話した若者の誰もが軍隊生活を嫌ったが、彼らに拒否する選択肢はない。沖縄の基地の現実を支えられた本土の平和が問題にされることは多い。だが三八度線で北の軍隊を止め、戦後日本の繁栄と平和を可能にした若者に関心を持つ者は少ない。彼らの戦いに巻き込まれないことを正義とする平和論者は多いが。

△静岡大学教授V

あなたにとって戦争を考える“切り口”とは――

と聞かれたら
(アイウエオ順)

